

中瀬有紀



© Joan Marcus

『ファンホーム』サークル・イン・ザ・スクエア・シアター

Weが生んだ ブロードウェイミュージカル

劇団四季に所属する照明家の前川美里さん、目崎花奈さんと一緒に、2015年のトニー賞ベストミュージカル作品賞を獲得し照明デザインが同賞ミュージカルベスト照明デザイン賞にノミネートした、ブロードウェイミュージカルの『ファンホーム』を観に行きました。この作品で私が注目していたのは独創性と団結力の調和です。ミュージカルを構成するすべての要素が、個性的でありつつバランス良く相互に連携していると感じられるのです。

『ファンホーム』の制作に従事されていた、エレクトリックミュージックデザイナーのヒロ・イダさんとサウンドデザイナーのカイ・ハラダさんの仲介のもとで実現したバックステージツアーでは、音響と照明の両オペレーターが公演終了後に私たちを案内してくれました。照明卓はETCのEOS Tiでプログラムされ、本番はIonでオペレートされていました。お互いにデータの交換が自由に行える点を活かした例です。ハウスライト以外の照明器材と、キャットウォーク以外の昇降設備はすべて持ち込みです。約180台使用されているETCソースフォーのうち約150台がLED光源のLustrであることにより、「初演からもう1年経つけれど、一度もメンテナンスの必要がない。」と照明オペレーターは嬉しそうに話します。「Lustrは綺麗にフェードアウトするか？再現色に満足しているか？」という前川さんの質問に、彼は「確かに淡い色合いを出すのは少々難だが、綺麗にゼロまでフェードアウトする。」と答えていました。

『ファンホーム』の照明デザイナー、ベン・スタントンさんは、私のデザインについての質問に、まず「こ

のミュージカルは、家族メンバー間の誠実さと壊れやすい関係性を描いている」そして、「この照明プランで最も大事に考えていたことは、話を明確に伝えること、ナレーターとキャラクターがそれぞれ別々の世界にいながら同時に時が流れていくこと、そして楕円形劇場の観客全員が同じ体験をすること」と答えてくれました。トライアウト初期の公演では原作の漫画を意識してプロジェクションを多用していたようですが、現行版に至ってそれは排除され、代わりに漫画のフレームをヒントにした長方形のモチーフが照明デザインに組み込まれていました。均一に空間に漂うヘイズも照明デザイナーの仕事であり、スタントンさんは劇場の空調を熟知してヘイズの具合を細かくプログラムしたそうです。ムービングのカスタムゴボは、ビデオデザイナーである彼の妻のルーシー・マッキンノンさんが70年代のテレビ番組にヒントを得てデザインされ、子供キャラクターが想像する家族の幸せを表現するために、大きな役割を担っていました。

スタントンさんとの会話の中で私が最も素晴らしいと感じたのは、すべての質問に対して彼が「I(私)」ではなく「We(私たち)」という主語を使って答えたことです。「We」に、ミュージカル『ファンホーム』に見た団結力の秘密が隠されていると感じました。制作に携わる多くのメンバーによる貢献と共有の精神が、『ファンホーム』の芸術的そして興行的な大成功へと導いたのでしょう。ヒロ・イダさんとカイ・ハラダさん、ベン・スタントンさん、そして劇団四季の前川さんと目崎さん、すべてのご協力と出会いに感謝します。